

世界最古のオーケストラ「雅楽」を楽しむ とよなか雅楽倶楽部



管弦の演奏場面。古式ゆかしい装束で宮廷文化の雰囲気をかもしだします。

雅楽は、日本で最も古い由来をもつ音楽。古来の歌や舞に、5世紀から9世紀ごろにアジア大陸から伝わった舞や器楽が加わって、平安時代の貴族文化のなかで集大成されました。華やかな装束を身にまとう舞の「舞楽」や、打楽器、管楽器、弦楽器の合奏で「世界最古のオーケストラ」とも言われる「管弦」などの演奏形態があります。宮内庁楽部が有名ですが、寺社を拠点に活動する民間団体の演奏も各地で行われています。



童舞を代表する曲目「胡蝶」は、子どもたちが蝶の羽を付けて飛び跳ねながら可憐に舞う曲です。

雅楽の主な楽器



笙(しょう)
長さの異なる17本の竹を吹き口がついた円筒形の器に差し込んだ構造。発音はハーモニカと同じ原理で、各竹管の先端についたリードが振動して音が鳴ります。いくつもの音を同時に出すことができます。



篳篥(ひちりき)
音量が大きく、存在感のある音色が特徴で、主旋律を受け持ちます。音域が1オクターブほどと狭いため、息づかいや唇の位置で音高を微妙に変える奏法が用いられます。その音は「地上で生活する人間の声」を表していると考えられています。

龍笛(りゅうてき)
篳篥に比べ、はるかに広い音域をもつ横笛で旋律に彩りを添える役割です。その音はその名のとおり、「空を舞う龍の鳴き声」であると言われてい



楽琵琶(がくびわ)
琵琶のなかでは一番大きい琵琶です。ペルシャが起源で、シルクロードを経て奈良時代に日本へ伝わりました。

楽箏(がくそう)
(がくそう)
楽琵琶と同じころに日本に伝わりました。他の箏と構造や材質はほとんど同じですが、指にはめる爪は大きく違っており、竹の節を小さく削り出し、皮で止めたものを使います。



片岡リサ先生に聞く

邦楽ミニ講座

邦楽の特徴

西洋音楽が和音を中心に旋律やリズムで表現することが多いのに対して、邦楽は楽器そのものの音色の特徴を大切にします。多くの場合、邦楽は、西洋音楽のように五線譜ではなく、口伝で伝承されています。演奏者の個性を重視して、楽譜に表現できないニュアンスをも伝えようとしているのです。私も師匠から「楽譜に頼ってはいけない」といわれ、師匠の指使いを見、音を聴くことに集中しました。箏や三味線の調弦は、常に同じ音高で行うヴァイオリンなどと異なり、弾く状況に合わせて行うなど、融通性が高いことも特徴です。



細棹三味線に比べて棹がやや太く、胴も重くつくられている中棹三味線。しっとりとした音色が特徴です。
楽器撮影協力:大阪音楽大学

江戸時代以降、庶民も楽しむ楽器として広まった三味線と箏を中心に、邦楽の歴史や特徴などを箏曲家で大阪音楽大学講師の片岡リサ先生にお聞きしました。

伴奏音楽として発達

鎌倉時代には、琵琶法師が琵琶を弾きながら語る「平家物語」が流行するなど、日本の音楽は物語や歌の伴奏音楽として発達してきました。三味線は、16世紀ごろに琉球(沖縄)を経て日本に入ってきた中国の三弦が改良されたものです。琵琶法師の演奏によつて、撥の活用が進み、歌舞伎にも用いられる長唄は細棹、地歌(上方が発祥の三味線音楽)では中棹、文楽(義太夫節)では太棹と、それぞれ演奏場面に合わせた種類が生まれました。江戸時代に入ると、庶民のあいだにも三味線の愛好者が広まり、民謡などにも用いられるようになって、日本を代表する弦楽器となりました。



この三味線の調弦は、琴柱の位置を左右に動かして行います。



片岡リサさん

大阪音楽大学卒業、同大学専攻科修了。幼少より箏・三弦を始め、多数の受賞歴を重ねる卓抜した技術と音楽性が高く評価されている。大阪音楽大学邦楽専攻講師(専攻主任)

三味線とともに広まる

箏は約1300年前、奈良時代に琵琶とともに大陸から入ってきたと言われ、宮廷音楽の雅楽に用いられていました。江戸時代の初めに、三味線の名手でもあった八橋檢校(やっしげんけんこう)が、奏法の工夫や曲づくりなどで現在の箏曲の基礎をつくりました。箏の形をした京の銘菓「八ッ橋」にその名前を残すほど、多くの門人を養成して慕われたと言われます。その後、「三味線(地歌)」と合奏されるようになったことで、箏は庶民に広まりました。

さらに、大正から昭和にかけて活躍した箏曲演奏家・作曲家の宮城道雄が西洋音楽の影響も受けた新作を多数発表して、海外にも評価されてきました。

伝統芸能にふれる子どもたち

市内には子どもたちが日本の伝統芸能にふれる機会がたくさんあります。そのなかから箏と能楽を体験し、発表する取り組みをご紹介します。

「片岡リサKids邦楽塾」

(伝統芸能館)

平成28年(2016年)で2回目を迎える「片岡リサKids邦楽塾」では、箏に親しみながら、稽古を重ね、参加者みんなで発表会に挑みます。子どもたちのなかには、学校の先生に勧められて参加した子どももいます。指導に当たった片岡リサ先生は「今年は二重奏ができるなど、曲の完成度が上がりました。子どもは関心をもって集中すれば、驚くほど上達します。稽古の後の達成感を味わってもらえたら、将来、自分が夢中になれることを見つけたら、自分だけになると思います」と話します。

参加者のなかでただ一人の男子で、4年生の高本理生くんは、テレビで調弦が自由にできる箏の特徴を知り、触ってみたいと申し込みました。2時間の練習は長かったけど、発表会を目標に最後まで頑張りました。6年生の松本和佳さん、5年生の岡本真依さんは2回目の参加。



修了証を手に全員で記念撮影。

二人とも昨年より上手に弾けるようになってうれしいと話します。



学校も学年も違う13人が練習を重ねて臨んだ発表会。緊張のなかにも一人ひとりが力を出し切りました。

サウンドスクール

豊中市では、平成18年(2006年)から大阪音楽大学と提携し、子どもたちが多彩な音楽にふれる機会を提供するサウンドスクール事業を開始。生の演奏を聴いたり、同大学の学生等による演奏指導の他、中学校では授業のなかで箏の演奏を取り入れる学校もあります。

「能楽・仕舞こども教室」

(紫苑閣能舞台)

「能楽・仕舞こども教室」は、観世流能楽師の山本博通さんから、文化庁の「伝統文化親子教室事業」の一環として開催。昨年で6回目を迎えました。7回の稽古を通して、扇子の扱いから基本の構え、謡の練習まで4人の能楽師による指導を受けます。稽古の最初と最後に大きな声であいさつすることも欠かさず実践。「子どもたちが能楽にふれた経験は、大人になってからもきっと人生の糧になるはず」と山本博通さん。この教室の他に小中学校への出前授業にも積極的に協力してい



全員による「高砂」の連吟の後、グループに分かれて練習してきた仕舞と地謡を交代で披露しました。



ます。

昨年が続いて参加した広瀬朗子さん(5年生)と晴子さん(2年生)の姉妹は二人だけで「合浦^{かほ}」を舞いました。母親の郁子さんは「今年は基本動作がわかってきて、上手にやりたいと意欲が出てきたようです。二人とも大きな声を出して積極的に取り組んでいました。新しいことにチャレンジ



ジして人前で発表できたことは自信につながったと思います」と話します。郁子さん自身も、この教室をきっかけに、能舞台の存在を初めて知るなど、親子で新しい世界にふれる貴重な機会になっているようです。

※仕舞は、能面も装束もつけず、演目のクライマックス部分のみを、地謡だけで演ずる、能楽のダイジェスト版とも言える演能形式。
※連吟とは、謡曲を二人以上で声をそろえて詠うこと。